

アーバン・イノベーション・セミナー
「関西における未来のICT産業を創出する事業戦略と企業連携」

【開催概要】

日 時：2012年2月3日（金）13時半～17時
場 所：ブリーゼプラザ サンケイホールブリーゼ小ホール（7階）
主 催：公益財団法人都市活力研究所
司 会：公益財団法人都市活力研究所 事務局長 九村喜勝



【開会挨拶】 専務理事 奥田耕二

ICT産業での技術の進歩は目覚ましいものがあり、それらを活用した様々なサービスが生まれている。それらをいかに事業や商品に結び付けるのが課題だ。その手法の一つとして、オープン・イノベーションが叫ばれているが、具体的にどうすべきかについての解答を見出すために実業界の第一線で活躍中の講師をお招きした。



【基調講演】 「うめきたで拓く新しいコラボレーションの形」

大阪大学サイバーメディアセンター 教授 下條真司 氏

ハーバード・ビジネス・スクールのクレイトン・クリステンセン教授が提唱した『イノベーションのジレンマ』を引用し、イノベーションの最先端で技術革新や改良を続けている人ほど新しいイノベーションに気付かないという危険性を指摘した。日本は既にこのジレンマに陥っているのではないかと警鐘をならし、脱却するためには新たなニーズや市場を見ることの必要性を説いた。また日本の技術の方向性として、プラットフォーム創りを提唱し、ロボット技術を具体事例として挙げ、提供者側が全てを作ることは必要がないことや周りが補完して全体としてうまくいくという、クラウドによる『知』の構築を推奨。これがこれからのICTにおけるイノベーションの本質である。オープン化することにより全く新しいマーケットの創出を示唆。最後に『うめきた』では、最先端技術に関する、単なる技術開発の場ではなく、それらを見せる場として機能させると説明。



【講演1】 「環境革新企業を目指して」

パナソニック株式会社 コーポレートR&D 戦略室長
(兼)産学連携推進センター所長 楠見雄規 氏

冒頭から『ICTを使って何をやるかが課題』という問題提起で始まり、パナソニック電工や三洋電機をも併せた巨大企業が進むべき方向性とオープン・イノベーションの大切さを力説した。全世界で36万



人の社員数を抱える企業であり現在エレクトロニクス産業自身が非常に厳しい状況。デジタル化が始まった頃から既に12年が経過し、現在私たちが抱える社会課題として『環境』を捉え、社として「顧客が望むものをきちんと提案していく」方針とのこと。エネルギーソリューション分野において技術開発のグローバル化は必須であることを、ハリウッドの映画と連携、ベルギーのフランダース政府からの支援、中国や欧州での水素燃料電池の話、大連でのスマートシティの展開など具体的な技術開発および海外連携の事例を挙げて説明。また、関西の特徴として、「環境やエネルギー産業拠点が配置され、企業とアカデミアとが隣接関係にありコミュニケーションを取りやすい」と指摘。今後の関西の発展可能性を強調した。

【講演2】 「シャープが推進するオープン・イノベーション」

シャープ株式会社 研究開発本部産学協同開発センター
戦略企画室長 三宅知之 氏

今年で100周年を迎え、これまで「オンリーワン商品」を生み出してきたが、非常に厳しい経営状況。これからは重点分野としてエコや環境に注力する。スマートグリッドでの環境を考えた安心の街の事例として、堺のシェアハウスを取り上げて説明。また、オープン・イノベーションへの取り組みとして、社に欠けたものを補い合うという意味において、技術マッチングや共同研究などを紹介。オープン・イノベーションで成果を出していくのは非常に難しいが社内に機運が芽生えてきているとのこと。2008年から始めた研究開発志向型商談会の紹介。単なる商談会ではなく、技術を求める会社や大学にソリューションを提供してもらう形で組み、多数の商談実績をあげている。また、金融機関をいれての面白い取組み事例の紹介もあった。今後の方向として、「オンリーワン主義」に対してオープン・イノベーションを導入する試みとして、新しい領域・新しい商品・新しい考え方を入れていく。社内の研究者や技術者の感性、面白い情報に対して反応が鈍いので、このあたりの感性、感性を向上させていきたい。



【パネル】 「ICT技術展望と次世代の競争に勝ち抜く事業戦略」

コーディネータ： 大阪大学サイバーメディアセンター
センター長 中野博隆 氏

パネリスト： 下條真司 氏、楠見雄規 氏、三宅知之 氏、
株式会社NTTドコモ関西支社 経営企画部長 佐伯秀一 氏

新しい技術が創出される中、ビジネスやビジネスモデルに変革をもたらす次世代の競争に勝ち抜くためにはどうすべきかについて「オープン・イノベーション」をキーワードに3つのフェーズに分けてディスカッションを展開した。



第1フェーズ「事業認識と期待する技術、分野、サービス」

下條教授が、かつて家電製品に抱いた「わくわく感」の大切さを力説。わくわくするようなものは今では海外から発信されている。いまの若者は生まれた時から既にいろいろなモノがあったので、そういった「わくわく感」というものを抱かないかもしれない。そのため、新たなものを創っていく喜びをきちんと伝えていくことが重要。



第2フェーズ「オープン・イノベーションと連携」

楠見氏よりオープン・イノベーションは研究開発の加速や投資リスクの抑制に集約されるが、企業にとっては技術ではなく事業目的をシェアして共通目的を持ち互いに補完するような会社と組むというアライアンスが重要とのこと。また、三宅氏より、次世代の人材育成はオープン・イノベーションのマインドがないとできない。新しいものを発想する力は異文化の方との接触だ。外部との接触のサイクルをいかに創るかが課題であるとの指摘。長期的な視点で考えるべき課題とのこと。

第3フェーズ「関西地域の特性は何か。関西地域の特性を活かして何かできないか」

楠見氏より、関西は自由に発想できる素地があるが、発想してもモノにする力が不足しているのではないかと指摘。佐伯氏より、大阪は東京を気にしすぎ。大阪には東京の人にはないロコミカがある。大阪は大阪で頑張っていくという気持があれば、大阪が復活していく。最後に、「次世代をリードするために一番重要なこと」というテーマでは、下條教授より、東京ではなくむしろ台湾や中国、シンガポールを相手に、日本の中で飛びぬけていくことが重要。まずは北ヤードを成功させることや佐伯氏より「関西から気のきいたものを出すこと。ヒット商品を作るのは難しいが、気のきいたものを沢山作っていく中でヒット商品が生まれると思う。」との示唆があった。



全体のまとめ

中野教授が、「これからオープン・イノベーションは重要となってくるが、注意すべきは我々自身がきちんとした考え方を持つということがオープン・イノベーションの前提として重要であるということ。および同じ感覚や志を若い人に持たせる教育や環境づくりが大事で多少コストがかかってもそういった現場を持つことは意義がある。」と締めくくった。

以上